

関西支部第 38 回例会 研究発表要旨

死という劇的装置とその作用 J. M. Synge の二つの戯曲における〈死なない男〉

小林 佳寿

J. M. Synge (1871-1909) の戯曲 *In the Shadow of the Glen* (1903)、*The Playboy of the Western World* (1907) では死んだふりをして妻の貞操を試す老夫と、息子に 2 度殺されかけるが死なずに生還する父親がそれぞれ登場する。死んだ登場人物が生きていたという展開は古くはギリシャ悲劇、そしてシェイクスピア劇でも度々扱われてきたありふれたものであるのは周知のとおりである。しかしシングの 2 作品では、そのありふれた展開を用いながら、登場人物を予期せぬ結末へと導く。*In the Shadow of the Glen* の主人公 Nora は羊飼いの恋人ではなく外の世界をよく知る浮浪者とともに家から出て行くことを選び、*The Playboy of the Western World* の主人公 Christy は父親の支配下にあった関係を自分が支配者に成り変わって故郷へ戻る。自分を抑圧してきた相手の死によって一旦自由になった主人公たちはその相手が戻ってくることにより、もっと大きな自由を獲得する。この展開は主人公たちの真の解放を強く印象づける。本発表では、古今の戯曲に見られる代表的な「死なない登場人物」を挙げながら、シングの戯曲に登場する「死なない男」との比較を試みる。そしてシングの 2 作品の〈死んだ（と思わせる）〉、〈実は死んでいなかった〉という戯曲の展開がそれぞれ主人公たちの行動や人物像をどのように変化させるのか分析する。

関西支部第 38 回例会 ワークショップの趣旨と各発表の概要

本ワークショップでは、ナポレオンという歴史的人物、またその名に付与されてきた象徴的意味が、時代やジャンルの異なる文学・思想の中でどのように読み替えられ、用いられてきたのかを考察する。P. B. Shelley、William Hazlitt、吉野源三郎、George Orwell をめぐる報告を通して、ナポレオン像と自由意思、歴史的状況、教育的価値、革命後の権力との関係を検討する。個々の作品紹介にとどまらず、文学が歴史的人物を倫理的模範、批判対象、政治的象徴へと変換する過程に注目し、歴史を語ることが読者の認識をいかに方向づけるのかについて、発表者と参加者による討論を行う。

発表者 1. 藤井 晶宏 (対象作家: William Hazlitt)

フランス革命に共感し、権力には抵抗する自他共に認めるリベラルだったハズリットは、同時に、後年自らその伝記を書き、その中でナポレオンを「賞賛する」とはつきり述べるほどのナポレオン支持者でもあった。ナポレオンとほぼ同時代を生きたハズリットにとって、すでにナポレオンは現実の存在そのものというより、旧体制の Legitimacy を打破する自由の体現者という意味を担っていた。

発表者 2. 江藤あさじ (対象作家: Percy Bysshe Shelley)

P. B. Shelley の “Feelings of a Republican on the Fall of Bonaparte” を中心に、ナポレオンが「別の選択をなし得た」人物として描かれる点を検討する。さらに、未完の歴史

劇 *Charles the First* における Cromwell 像と国王殺しの表象を参照し、自由意思、歴史的責任、そして観客の同情を方向づける文学的表現の問題について考察したい。

発表者 3. 深谷 格（対象作家：吉野源三郎）

吉野源三郎『君たちはどう生きるか』（岩波文庫、1982 年。初版は 1937 年刊行）にはナポレオンが登場する。当時の小学校（尋常小学校と高等小学校）の国語教科書における歴史上の人物の取扱い、特にナポレオンの教材としての用いられ方を、吉野源三郎『君たちはどう生きるか』におけるナポレオンの取扱いと対比し、時代背景を踏まえて、両者が伝えようとしたメッセージを解釈してみたい。

発表者 4. 高橋 一馬（対象作家：George Orwell）

George Orwell の *Animal Farm* (1945) には、農場主の人間に反旗を翻した動物たちの代表として 2 匹の豚が登場する。Orwell はこの 2 匹の内、やがて独裁体制を築いていく豚にナポレオンという名を付けた。スターリンを表象するキャラクターである豚に、なぜあえてナポレオンと名付けたのか。Orwell 自身のナポレオンに関する言及を元に、ヒトラーから連なる Orwell にとっての独裁者像を考える。